

だから、狐の嫁入とは此時よりぞ始りけるか、アツハ、ハ、ハ、ハ、と、星野は洒落口。磯子も覺えず片頬に笑顔を寄らせて、オホ、ハ、ハ、ハ、。

### 工便 大變事

大變！大變が起りました。誰か早く……と、隔ての襖を蹴開くと云はんよりは、寧ろ双手に前へ突き倒して、その身も共に轉び出でつゝ、政子は聲の限りを絶叫するなりけり。

玄關の側なる應接の室に在りて、睡眼を擦りつゝ、恰も今大内家の代理者に對して、磯子が婚禮延期の儀を哀願最中なりける若主人の賢一は、逸早くもその聲を聞き付けて、跳ね上るやうに椅子を離れつ。貴郎失禮で御座いますが、一寸暫時……と、言ひ捨てたるまゝ、幕地に奥へ馳せ來りて、阿母さま、何事です。磯子が井へても投身して居つたのではありませんか？

政子は宛然早腰を抜かしたる人のやうに、盥へ尻餅を搗きたるまゝにて、市之進が居

室を指ししながら、いゑ、磯子ぢやありません。ち、ち、阿父さまが、今何者にか殺害せられて……。

ひえッ、阿父さまが……と、賢一も等しく其場に絶倒したるが、纔かに元氣を取直して、阿母さま、夜明とは云ひながら、瓦期は此通りかんくんと點いて居るし、家内の者も悉皆斯うして徹夜で起きて居るのに、曲者などの忍び込むべき道理はないぢや御座いませんか。

縦ひ道理があつても無くても、お前早く其方の室へ入つて……阿父さまは既う血に染つて、褥の上に倒れてお在なざるぢやありませんか。

えッ、血に染つて……と、賢一は既やがたくと胸震ひしながら、及び腰に父が居室の内を差覗きて、ヤッ、こりや大變！阿母さま、どッ、甚麼したら可いでせう。大變大變！一同早く來て呉れんか。

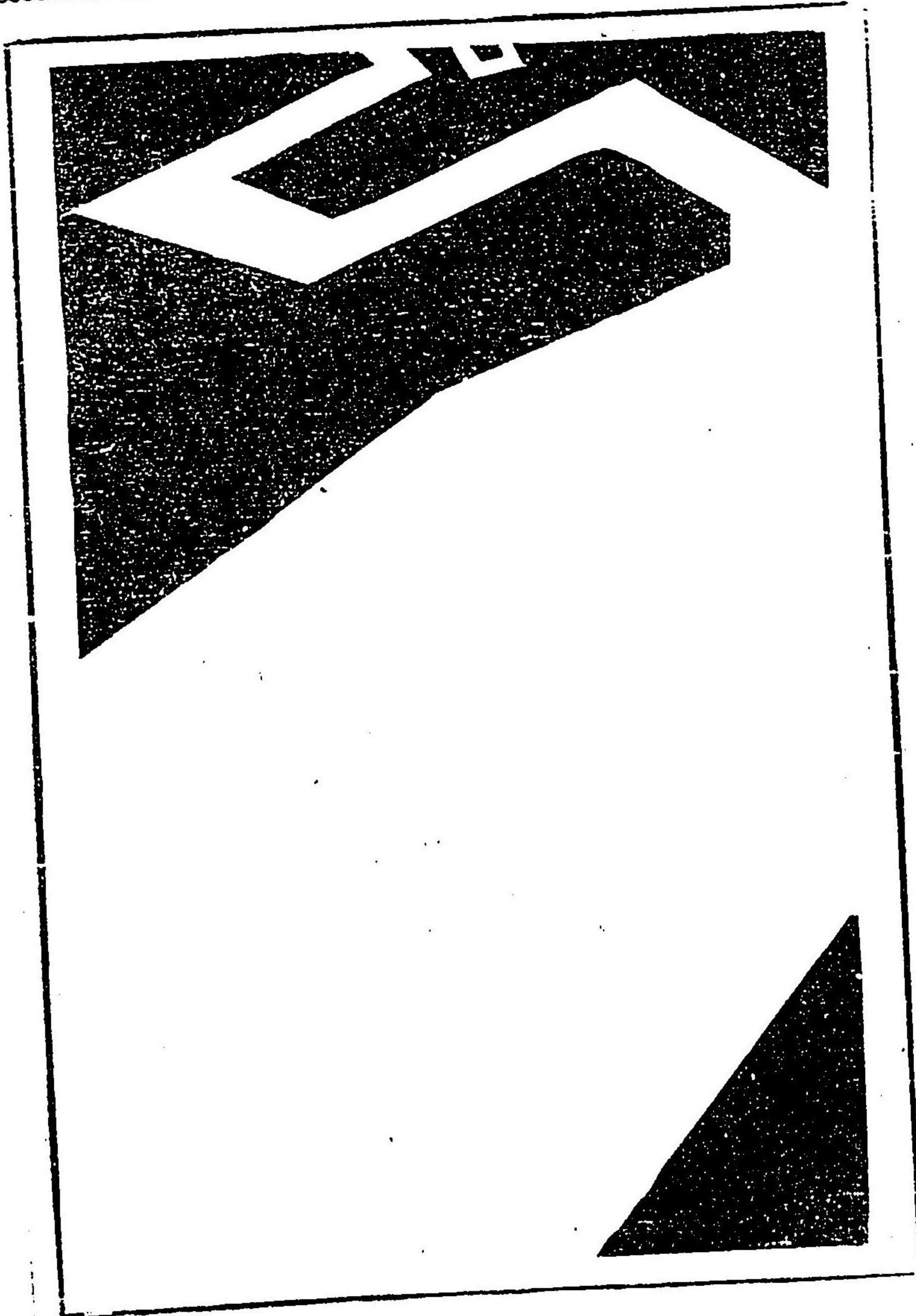
氣味わるくも睡を定めて、倩々と視やれば、市之進は實に全身血に染りて、俯向けさまに絹夜具の上へ打倒れたるまゝ、既に此世の息は絶え居るなりけり。而もその傍

には、泥の足痕明瞭と残りて、素人眼にも確に曲者の忍び入たる形跡は知られぬ。

おくれて駆け来りたる家内の一同は、此悲惨なる有様を見るより、啞然、愕然、又茫然として、殆んど爲すべき術を知らざるものゝ如し。彼の大内家より談判に来れる男も亦此中に交りて、只々事の意外に呆れ居たりき。

阿母さま、責ては貴女だけでもち氣を確乎とち持ち下さい。今更泣き騒いだ所で、追付く話ではありませんから、其筋へ訴へ出るより外はないでせうと、賢一は強て我精神の顛動を抑へ付けつゝ、誰でも好いから早く電話を警察へ掛けて、此始末を訴へて呉れ。が、併し……と、特に分別らしうも眼を睜りて、父が死躰の近くへ差寄り、甚麽も強盗などの所行とは思はれんやうだが、阿母さま、貴女は若しや曲者の後影だけても御覽になりは爲ませんでしたか。

政子は辛うじて打領きて、悲哀と驚愕とに閉されたる胸を撫てつゝ、何でも覆面をした壯い男らしい者が、刀のやうな物を抱へ込みながら、裏手の方へ逃げ出して行く後姿を……。



アノ覆面をした壯い男が刀を持って……と、言ひながら賢一は倍と兩腕を拱ぬき、思案の小首を打傾けしが、阿母さま、證據のない事ですから、迂濶口外する譯にはゆかんですが、磯子が今夜になつてから突然行衛不明になつた事と云ひ、阿父さまが此御最期と云ひ、十中の八九までは最う目的が付て居ります。

とは賢一、何者に……り。

いや、その事は今此所で申上げなくても、今に其筋の方々が御臨檢の際に、僕から只參考として申立てる考へてす。

賢一は左も判て捺したやうに答へて、他で驚ける割合には落着き顔に見えたり。

と便 注進

義さま、最う銀次が来て呉れさうなもんで御座いますねえ。

昨夜まで星野さまと呼び居たる磯子の、今朝に限りて、義さまと呼ぶさへいと際立ちて馴々しげなるに、義之助が脱ぎ捨て、置きたる書生羽織を静と背後より被せてや

るなど、昨夜一夜の寝物語は、乍麼に此若き二人が心を、平和の境に近かしめたるかを知られぬ。

最う程なく遣て来るだらうから、何も那麼に案じる事はないよ。甚麼か大内家との談判が此方の思ひ通りに、全然破壊に了つて呉れ、ば結構だがねえ。

そりや妾、大丈夫だらうと思ひますわ。それにアノ妾、義さま、縦しや間違つて、大内家との談判が此方の思ひ通りに行かなかつたにしてが、妾は最う、最う、妾は、首と胴とが別々に成たからと云て、郎君のお側を離れるのは、厭で御座います事よ。

アツハ、ハ、それぢや全然毒蛇に魅されたやうなもんだねえ。  
アラ、酷い事ねえ義さま、妾の事を毒蛇に喩へるなんて、妾、那麼郎君を取殺すやうな心で居るなら、疾くの昔に兒玉の茂登子さんでも取殺してやりますわ。

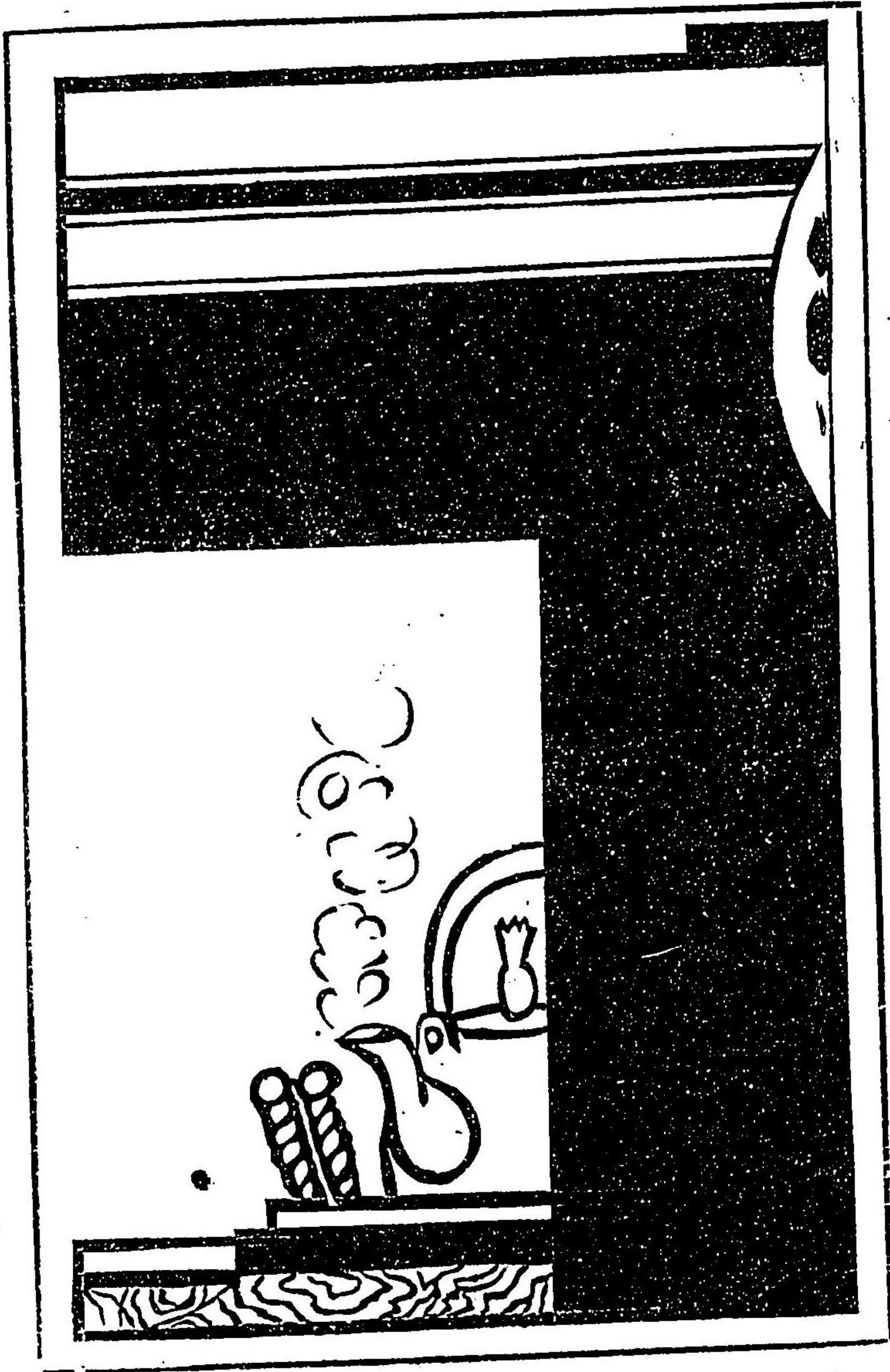
ナニ茂登子さんを取殺すつて？そりや飛んでもないお門違ひだよ。併し、茂登子さんと言へば、彼の以來、ムツつりと斷念して了つたと見えて、一回の消息もないのが奇妙ぢやないよ。

マア本統り、それが本統なら、妾、甚麼に嬉しいてせう。ねえ義さま、それに就けても何卒アノ妾を他人として交際ふんだなんぞツて、彼様堅くろしい事被仰らないで、矢張以前のやうに許婚の妻として可愛がつて頂戴よねえ。妾、本統に阿父さまや阿兄さまが郎君に對して今日まで行つて來た残酷の罪を、一身に引受けて、お償ひする覺悟で居りますのよと、磯子は眞面目なるが上にも、眞剣に眞面目に言ふなり。

ナアニ、その氣遣ひに及ぶものですか。僕の眼中には失禮ながら、最初よりして最う和女の阿父さまや、賢一君の事は置いてないんだもの、アツハ、ハ、ハ、ハ、と、星野は一點の蟠りもないやうな高笑ひをなしつつ、マア磯ちゃん、那麼事は甚麼だツて構はんから、お互に死ぬるまで心安くして貰ふと爲やうぢやないか。

いゝ妾、死ぬるまでなんて、那麼期限のある事なら、厭で御座いますわ。生々世々未來永劫可愛がつて下さる思召しでなければ……オホ、ハ、ハ、ハ、。

アツハ、ハ、ハ、それやなか〜慾の深い話だねえと、星野は其實十二分の満足を表して。



鶴龜の蓬萊臺こそなけれ、松竹の縫ある錦の桶櫛をこそ着飾らされ、友白髪の末かけたる心と心との結婚は、却て此些やかなる仕事師が二階の六疊間に於て、高砂の浦浪静かに長閑けき談笑の間に執行はれたるなりけり。

例の威勢好き銀次はそれとも知らずに、突然戶外より駆込み來りて、片息ながらに階子段を駆上ると等しく、オウも二人さま、だ、だ、大騒動が持上りましたから、お知らせに來まして御座えますよと、眼の色を變へての注進！

二人は先づ度膽を抜かれて、覺えず左右に後退りぬ。

銀次は息苦しさうに胸を叩いて、マアも二人ともに氣絶てもなさらねえやうに、精神を鎮めてお聞きなせえましと、何様大騒動の湧き起つたらしい枕詞。

コレ銀次、お前又我々を擔いで、跡から手を打て笑はうと云ふ悪洒落なんぢやないかへ。那麼人のわるい事をせんでも、早く何卒金岡家の容子を聞かして呉れと、星野は驚きの中にも、幾分かまだ串戯の意味を有ちつゝ、問ひ返しぬ。

いる、甚麼致して、串戯から駒が飛び出すどころの候ふの權八ぢやねえんで、金岡の

大旦那がソノ今朝の夜明方に、何奴にか斬殺されてお了ひになつたんで御座えます。

えッ、金岡の小父が……？そ、そ、そりや銀次、餘り夢のやうな話で、眞に受ける事が出來んぢやないか。

出來ても出來ねえでも、眞實だから仕方がねえんで、お蔭でお嬢さまの婚禮一件なんざア、茶々無茶になつて了えやしたが、本統に人間の一生ほど異昧の分らねえものは御座えませぬねえ。

聞き居る磯子は、驚愕の度を通り越して、却つて茫然として自失せるもの數時、宛然死せる人の眼を睜きて座したらん如き有様なりしが、竟にその儘星野の小膝に打倒れて、正躰もなく泣き沈みぬるこそ道理なりしか。

磯ちゃん、道理です。和女の心中は實にお察し申すですと、星野は語靜かに磯子を慰めつゝ、更に銀次の顔を視上て、所て銀次、その曲者と云ふのは、直に其場で捕縛にでもなつた容子かね。

サア、それならばまだしものこつてすが、強盜の所業か、但しは又意趣遺恨のある奴

の所業か、それせえもまた判然しねえて居るんで、いや最う奥さまを始め家内中皆狂氣のやうな騒ぎなんて御座えます。

ハア、遺恨か強盗かも判然せず居るとは、尙更以て困つた譯だがと、星野は我知らずその太き眉根を打盛めて、併し、多少の手係り位はありさうなもんだねえ。

真個然うて御座えますよと、銀次は乗込むやうに合槌を打ちしが、地躰マアお嬢さまの前ぢや申しにくう御座えますけれども、金岡の大旦那と云ふ方も、今日の身分にお成なさるまでには、随分人の知らねえ無理を爲て御座つたらしい評判で御座えますから、殊に依つたら此軍配は遺恨の方に揚るかも知れませぬねえ。

大きに……と、星野は軽く首肯さて、だがね銀次、矢先が矢先であるから、間違つてその飛沫が此方の方へても回つて来るやうな事が……と、言ひさして、又その跡を言ひつゞけんとする時、ガラリと階下の格子戸を開きて、御免と聲高に訪ふ人あり。銀次はオヤツと首を回して、暗に星野の方へ注意を與へたりしが、それと殆んど同時に、此家の女房即ち銀次が姉のお國が、取次に起ち出て、二語三語その人と押問答

するらしき氣色のありしに、二階の三人は言ひ合したるやうに息を潜めて、篤と小耳を澄し居たりき。

いや、強て拒むやうなら、職權を以て踏み込むまでぢやが甚麽ぢや。

稍怒りを含めるらしきは、言ふまでもなく警官の語調にして、是に對するお國の答辯は、語一語、句一句毎に甚だしき恐怖と澁滞とに聞き取り得ざるも、大學生……星

野……存じません……等の語は、折々微かに漏れ聞えつ。ア、已ぬる哉、星野は正しく市之進を殺害せる犯人の嫌疑者として、其筋に引致せらるべき淺猿しの運命に到着したるなりけり。

### モ便 蟲の音

星野は竟に引致せられき。磯子も亦關係者の一人として、一びは警視廳まで伴れ行かれたりしが、只一回の調べを受けたるのみにして、翌る夜の十時近頃、一先づ放免の沙汰に接しぬ。

かくて、詮方なくも紀尾井町なる我屋敷へ歸れば、母は有繋に不幸中の幸ひとし  
て、磯子が無事の歸宅を悦び迎へたりしが、兄の賢一は既に父なき後の金岡家が當主  
は我を措きてあるべからずとやうなる顔色して、妹歸りしかとの語さへ口に出さず、  
打て變れる權威の振舞、兄ながら口惜しきほどなり。

然はれ、當座の五六日が間は、此大變事の跡始末のために、一家内殆んど喧騒と混雜  
とに日と夜とを打消されて、銀次が所謂磯子の婚禮一件などは、茶々無茶の中に葬り  
去られたりしが、今日市之進が横死の初七日と云ふ日の朝に至りて、思ひきや大内家  
の方よりは二人の辯護士を以て、驚くべき嚴重の談判を持ち込み來りぬ。其要は即ち  
今回の婚禮準備のために費したる金額と名譽の損害とを、約二萬圓と見積り、即座に  
是を支拂ひありたしとの事にてありき。

賢一は確と窮しぬ。窮せるの餘り、不圖思ひ付きたるは、星野家の遺産として、父が  
年來保管の義務を掌り居たる三萬圓の事なり。何れは義之助より正當の手續を経て  
請求し來るべき時節はありとするも、彼は今未決囚として監獄に在るのみならず、婚



禮問題の斯く破壊に了りたる理由はと言へば、正しく彼と云ふ厄介者の附き纏ひ居たる結果に外ならねば、是を以てそれに充つるは、元より當然の事なるべしと、父の子に生れつきたる賢一、我懐の痛みを感ぜざる限りに於て、左にも右にも大内家との縁切談判は落着を告げたり。

然るほどに、磯子は二萬圓にも三萬圓にも代へがたき義之助が嫌疑事件の、寸刻も早く晴れて白日の身となれよかしと希ふ一念矢も楯も堪らず、思ひに思ひ、惱みに惱みて、思ひ朽ち、惱みはてたるトドの詰りは、切ても心のやりにと、嗜みの畫筆を丹花の唇に噛み砕いての葉書幾葉、溶くよ涙の繪の具さま。眼に心に浮び来るまゝの花鳥山水乃至は寓意の圖樣こそ異れ、彼の人の心を慰むるに足るべき材料を盡して、朝と云はず、夕と云はず、出來たる分よりくち染に命じて、ポストに投ぜしむれば、星野よりも亦折にふれての感慨を寄せたる俳畫の繪はがき、五日に一片、七日に一片づゝ我名宛にて送り來るに、互の無事と互の心の滲りあらぬ證據こそはそれにも知らるれ、憂きは一入身に泌む夜風の、霜の庭面に寒月一輪！照す光は同じからんも、う

たてや彼の人は身に覺えなき罪の牢屋に、我は得遂げぬ戀の牢屋に、望む思ひを思ひ比べて、冬の哀れを鳴き盡すらん蟲の音の、細く悲しき窓の邊りに、起ち盡す夜半さへいと多かり。

### 七便 年の市

年茲に暮れなんとす。春は隣り屋敷に餅搗く音のみ賑しうひゞけど、藪にさゝ啼きの鶯はまだ耳に止らず、只さへも軍國の遠慮がちなる人の心は、不景氣の風にいや怖氣立ちて、市の商人が召せくの空呼はり威勢ばかりは何れほどに好くとも、押繪の羽子板に羽の生えて飛ぶやうなる景氣は儲措き、かんでらの油代さへ收入なきこそ哀れなりけれ。

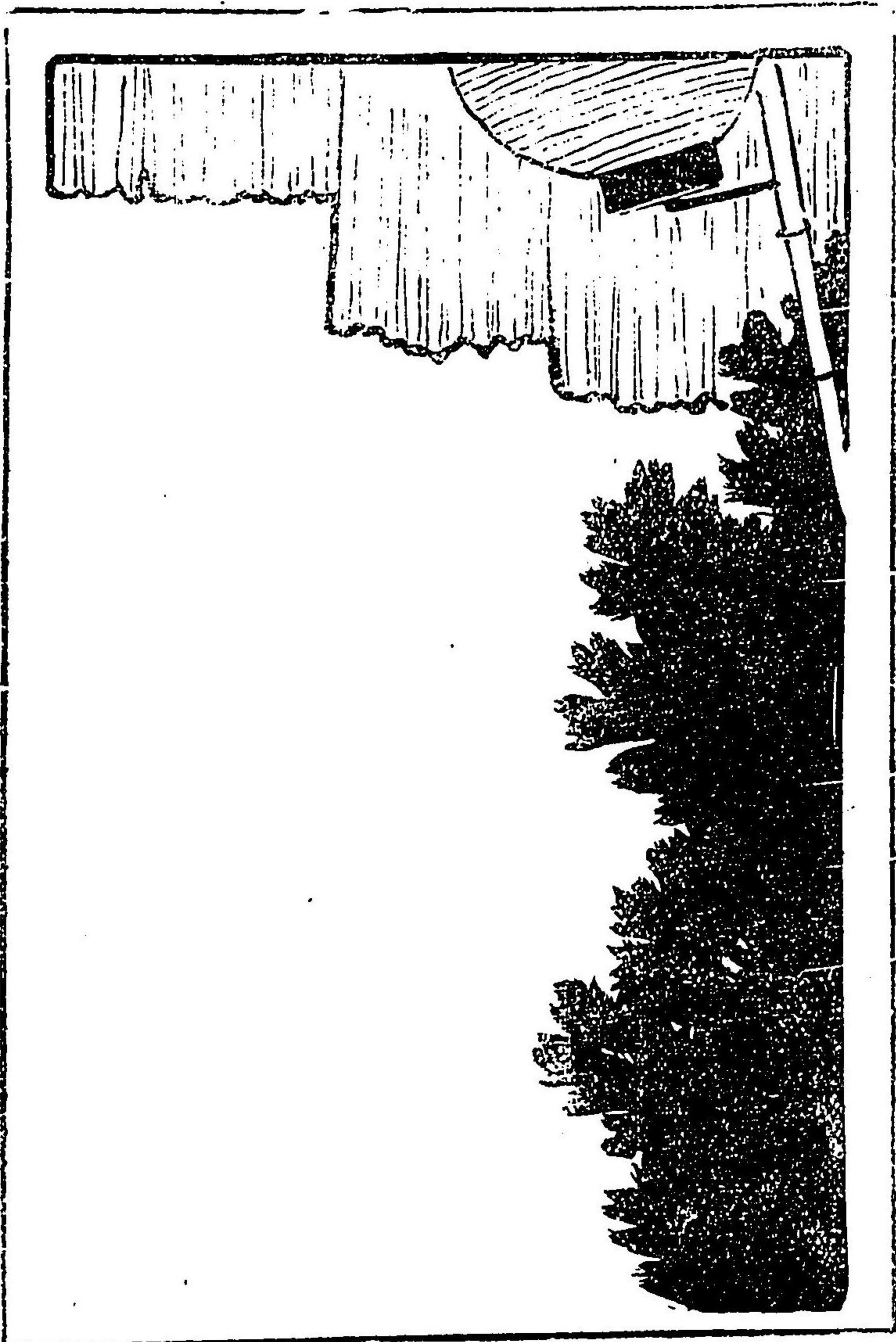
就中て山の手は屋敷者の多きに、今日平河天神の市とこそ云へ、宵の間の一しきり、有造無造の類れ打つて押合たる跡は、忽ちにして又平生の縁日にも劣れる淋しさに返りつ。商人は皆空風に頬桁を吹かせて、腕組の肌寒げなるが多けれども、有繋に植木



店のつゞきたる邊りは、折々細君か権の守かは知らず、なまめかしげに手を把り合ふて、春の飾りの梅、福壽草などと植込込みたる廉鉢を置ひ行く鶯鶯の幾組かを認めぬ。アラ好くてねえ、彼の朽木になつてる咲分のが……妾、彼が一番眼に附いてよ。ハ、ア、成程、彼かへ。ぢや彼に爲やうか。

是も御多聞に漏れざる一組なるべく、男はインパチスの襟を立て、黒の山高朝を眉深に頂き、女は獅子の頭とも見まがふばかりのむくくとせる羽衣シヨールに半面を掩ひて、而も嫉ましさまでには密着合ひつゝ、只ある植木店の盆梅を素見し居るなりしが、それに又十數歩おくれて、一人の女中を従へたる花月巻の令嬢らしきが、そろりと懶げに歩みを運び來りて、稍ひねこびたる野梅の鉢植に眼を注げ、立ち止りたる横面を篤と視やれば、こは正しく金岡の磯子にして、女中は例のお染にてありけり。ねえ染や、此方が先刻のよりは自然の枝態で、寫生には丁度好い格好だわねえと、子は延び上るやうにして、お染にその鉢植を指示しつゝ、

ほんに左様で御座います事ねえ。ドレ妾かお價格を聞いて見ませうか。



ア、聞いて見てお呉れな。甚麼も義さまのお好きなやうな木態のが少いんだもの。それを妾が又下手な寫生で、尙更打毀して了ふかも知れないけれどもねえホ、ハ、マア、左も右も妾聞いて見ませうよと、お染はつかくくと植木屋の老爺が側に差寄りしが、偶然鬢の小櫛の脱けかゝりたるに氣付きて、とを直さんとする途端、何氣なう彼の二人連に眼を注ぎて、オヤツと覺えず仰天の面色！

染や、和女甚麼かお爲の。

お染は、益裁の價を其方除けのけたまはしさに礮子の耳元へ口寄せ、マアお嬢さま御覽遊ばせ、若旦那様と茂登子さんが彼所に……。

えッ、阿兄さまと兒玉さん……？と、礮子も共に意外らしき眼を睜りて、彼の二人が後姿を凝視居たるが、是も心から呆れたやうな面して、マア呆れた。眞個阿兄さまと兒玉さんなんだねえ。

跡は主従暫時無言に呆れ居たる折しも、俄かにどやくと人の立ち騒ぎながらに駈出づる足音！何事やらんと主従不審の顔を見合せつる間も有や無し、拘摸が捕つた、イ

ヤ本物の盜賊が、イヤ〜紀尾井町の殺人犯の嫌疑者が……と口々に罵り喚めく人聲耳も聳せんばかりに聞えぬ。

ス便 春霞

普通の拘摸か盗人などの捕縛せられたる騒ぎならんには、礮子に取りて、素より何等の感じもあるべき筈なけれど、紀尾井町殺人犯の嫌疑者てふ聲は、實に彼女の上には、思ひがけなき天來の福音にてありけり。

彼女は其の眞偽何れかを確かめんとの心なるべく、お染の袖を控へて制止するをも肯かず、八方より集ひ來れる彌次馬の群集を押分けくつて、恰も今二人の角袖巡査と一人の正服巡査とに繩取られつゝ行く一人の男が容貌風姿を打視たるに、年の頃二十三四の中脊中肉の書生跡にて、何様拘摸又は小盗みなど働くべしとは受取がたき人品なるが上に、懷ろに數冊の西洋書籍をさへ所持せる容子の、少くとも中學程度の學問位は、修め來れる人間とは見えたり。

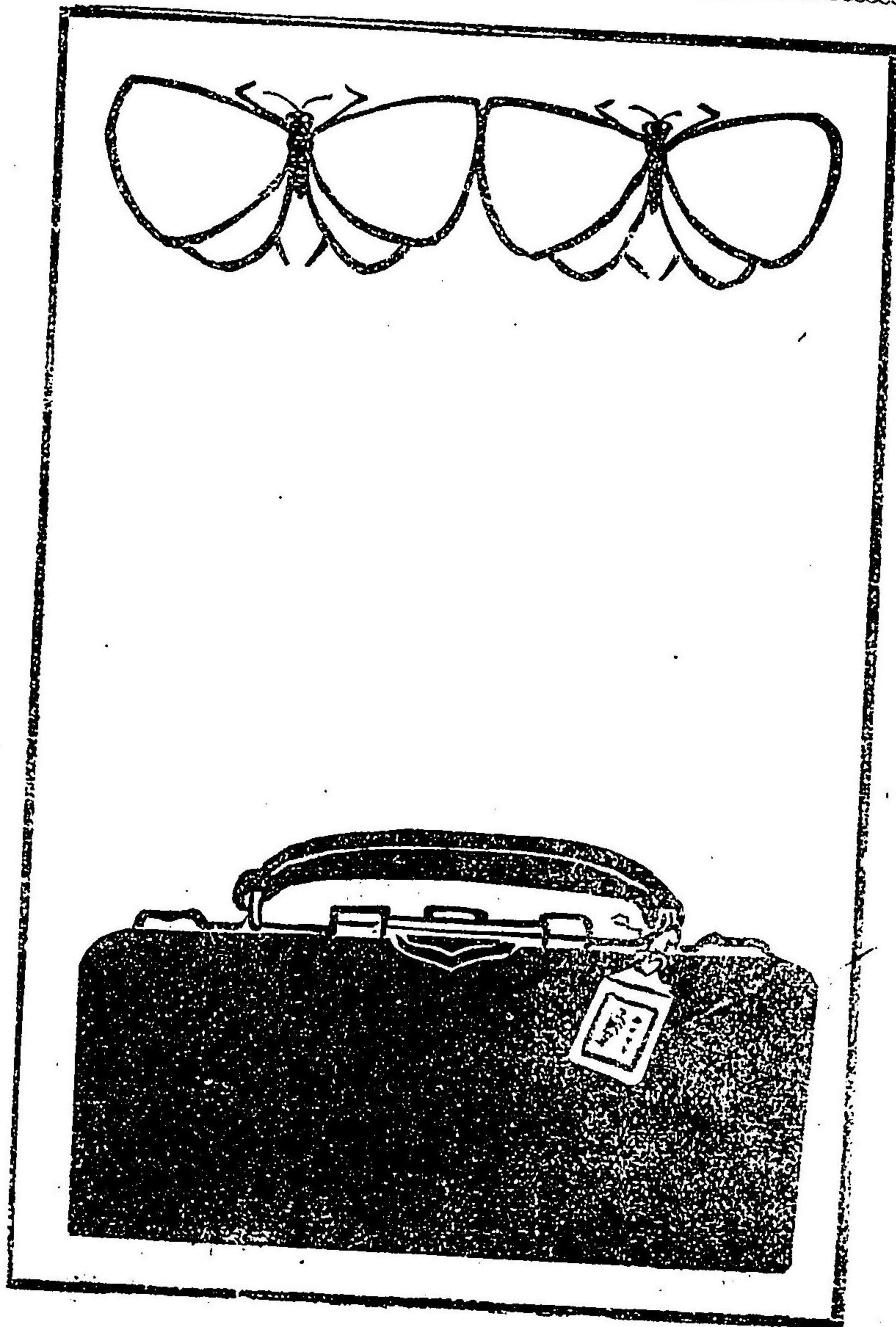
磯子はいよく判断に苦みながらも、此場合別に奈何とも爲べき様なく、唯一種の疑團の雲に包まれつゝ、お染と共に家に還りて、母にも語らず此一夜を案じ徹しぬ。翌る日の朝は来れり。磯子は何心なう机邊に有合したる新聞紙を手に取り、視るやともなく打視たるほどに、所謂前夜の三版記事として『金岡家殺人事件の正犯人逮捕』の大々的二號活字の一節こそ、先づ眼に映りたれ。偕はと彼の事どもを思ひ合せて、露く胸を押鎮めつゝ讀み下せば、『犯人は元被害者市之進の郷里なる福島縣出身の學生にして、名を金岡源五郎と呼び、市之進の生家とは本家分家の關係を有する者なり。犯罪の原因は今を距る二十年以前即ち被害者市之進かまだ微々たる星野家の一番頭として仕へ居る頃、生家の本家にして且其地方屈指の資産家たりし加害者の父が或鑛山事業の失敗のために、財政の整理方を市之進に依托せる時ありしが、性來貪慾殘忍にして飽く事を知らざる市之進は、好機逸すべからずとなし、本末の徳義を捨て、骨肉の情誼を無視して、手の届かん限り本家の動産不動産を我所有名義に書換へ、事の落着後に至るも、更に是を本家の方へ還附せざりしかば、加害者の兩親は竟に市之進

が非道の計ひを憤滿せし餘り、殆んど同時に狂氣して、共に無殘の變死を遂たり。加害者源五郎は其當時こそまだ東西知らぬ子供にてありけれ、漸く成人して我家の没落到に了りし顛末と市之進が殘忍の處置とを聞知し、其遺恨遣る方なくして、復仇の念寸刻も頭腦を離るゝ事なかりしが、其極遂に自暴自棄の無分別を起して、今回の兇行を仕遂るに至りしなりとぞ。而して、壘の嫌疑者たりし星野義之助は無論當然の結果として、昨夜半直に獄舎の羈絆を脱する事を得たりと云云』

今ぞ知る、市之進が一身上の大秘密とは、實に是にてありしなりけり。言ふまでもなく、政子も賢一もはた磯子も、茲に初めて我眞實の良人たり父たる人の正躰をこそ知り得たるなりけれ。

\*\*\*\*\*

あはれ此事の世に發表せらるゝと等しく、賢一が終生の大希望なりける茂登子との結婚の約束は、茂登子が絶對の抗議に依りて一も二もなく破壊せられぬ。素より黄金の前に白旗を掲げたる茂登子の、是がために裏切したるは敢て訝むに足らざるなり。



唯義之助と磯子との戀に至りては然らず、殊に政子が悔悟の熱誠より出てたる奔走、盡力の効果は、二人が上に幸福の機運を早めて、世は大海日の修羅場にも似たる最中を、あひに相生の松新しさ大磯の海邊へ……。

瀧の川のお絹婆と仕事師の銀次とは、共に子供の役を仰せ付かりぬ。

知らず、新玉の春美しき朝霞は、先づ眞先に此新夫婦が欄に凭りて見交す笑顔の、その邊りより立ち初めしならんか。

系はがき帖 (終便)

7/29

明治三十九年三月廿四日印刷  
明治三十九年三月三十日發行

系はがき帖奥附

著 者 小 林 芳 三 郎

發 行 者 靱 津 朝 雄

發 行 者 高 橋 儀 市

印 刷 者 佐 久 間 衡 治

印 刷 所 株 式 會 社 秀 英 舍

發 行 所

東京市神田區小川町  
東京市牛込區早稲田馬場下町

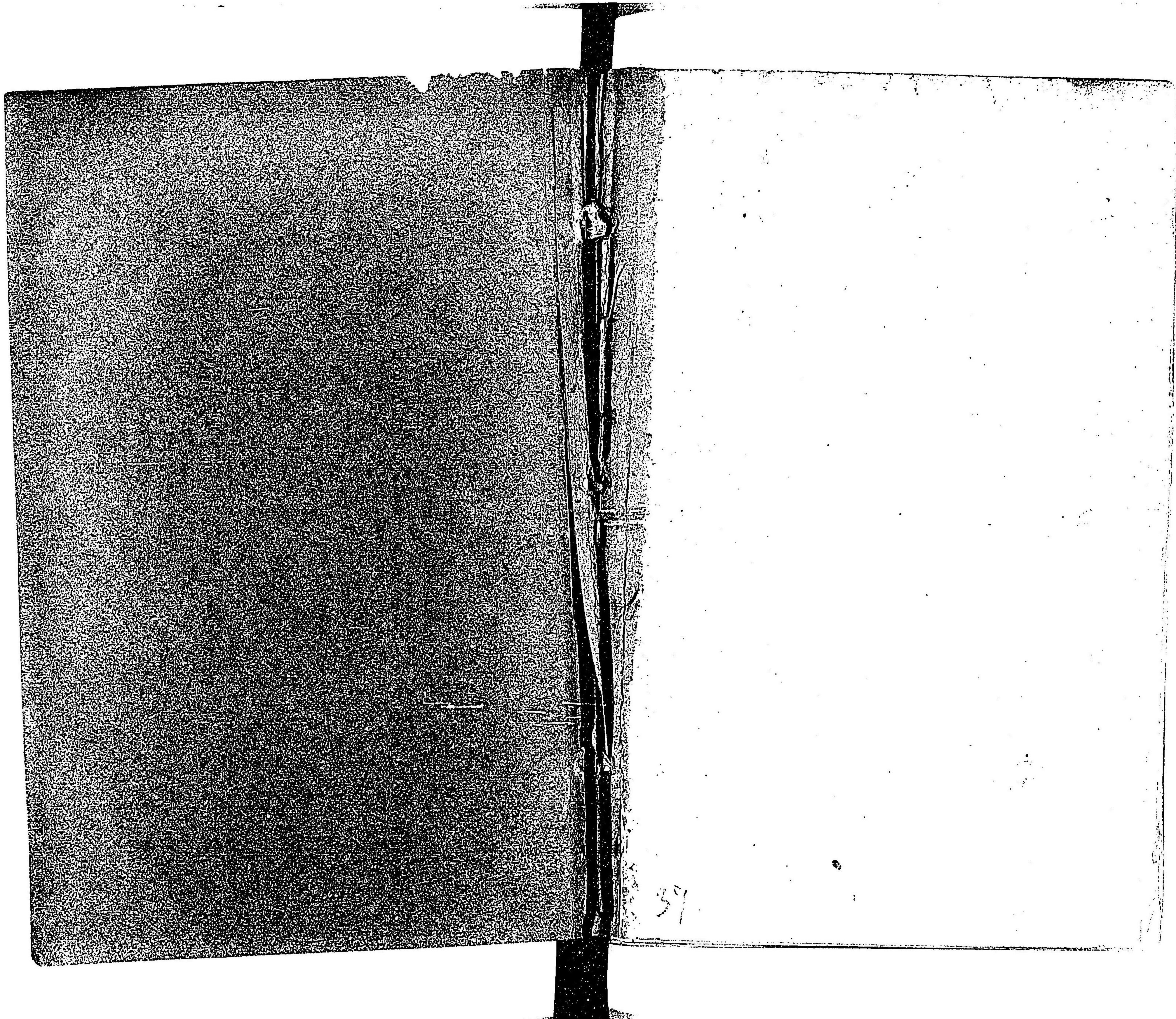
寶 永 館 書 店

(電話本局 三〇九六番)



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

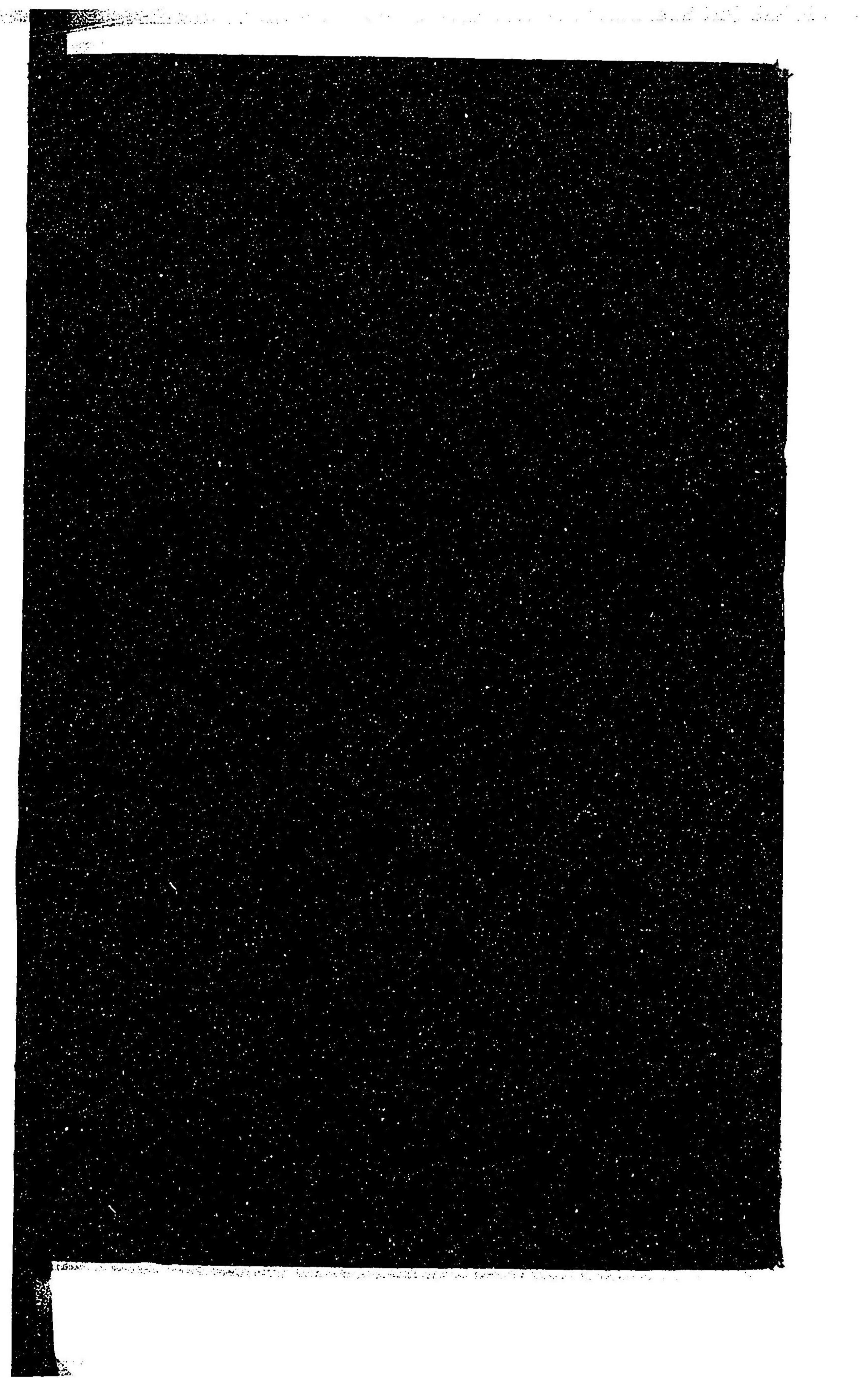
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地



37

32

288





32  
288

093013-000-0

32-288

えはがき帖

小林 躑月 / 著

M39

DBQ-0336

